最終回

「荻窪の記憶」

こぼればなし

おわりにかえて

「荻窪の記憶」は地域の歴史を掘り起こし、後世に伝えようとはじめた当協議会のプロジェクトです。その成果は数度にわたるパネル展示で発表してきましたが、こぼれ落ちた「記憶」も少なくありません。そうした「記憶」を拾い集め、コラムで紹介してはどうかとはじめたのがこの「こぼればなし」です。こんなに長く続くとは思ってもいませんでしたが、連載開始からすでに足掛け7年。そろそろ筆を折る潮時だろうと判断した次第です。最終回にあたって、いったい、私は、何を伝えようとしてきたのか、振り返ってみたいと思います。

プロジェクトの一環として立てられた標識。だいぶ貫禄がでてきました

明治のエリートに別荘の適地として見いだされ、

やがて、大正の自由な風が吹く、緑ゆたかな住宅地へ。

これは、「大田黒公園周辺100年の歴史」をテーマにした第一回の『荻窪の記憶』展のキャッチ・コピーです。「明治のエリート」とは、欧米に留学し、様々な分野で日本の近代化を担った人々。のちに荻外荘を建てる医学博士入澤達吉もその一人でした。彼らが郊外の武蔵野に別荘地を求めた背景には、急速な工業化がもたらした都心の大気汚染もあったようです。

荻窪の宅地化が本格的に始まるのは関東大震災後のことですが、荻窪に居を構えた人々には、音楽評論の草分け大田黒元雄をはじめ、画家や漫画家など大正の自由な風をまとう文化人が多く含まれていました。

そして、迎えた激動の昭和。公開が始まった荻外荘が、その舞台の一つになったことは、みなさんよくご存知でしょう。少々硬い話になりましたが、荻窪が、明治、大正、昭和の記憶を通して、日本の「近代」の明暗の歴史を語りかけてくれる稀有な町であることを改めてお伝えしたかったのです。

ところで、私はこのコラムを書くようになってから、よく自転車で町を走り回るようになりました。その自転車が娘のお古でピンク色だったために奇異の目で見られたこともありましたが、目的の一つは武蔵野のかけらを探すことでした。「かけら」というのは、武蔵野がどんどん消滅し、その「かけら」しか残っていないからです。天沼に住んでいた小説家上林暁は書いています。

「武蔵野はめまぐるしく変貌する（略）それだけにまた、古い武蔵野の面影を伝へるものは、路傍の石地蔵にしても、風除けの樹木に囲まれた藁屋根にしても、よけい心ひかれるのである（『武蔵野をたずねて』）」

毎年、武蔵野の名残りであるケヤキやクヌギの新緑に出会うことは大きな喜びでしたし、武蔵野の佇まいを残す清水の農家を知ったときは、『都心から一番近い武蔵野』と写真入りで紹介しました。起伏の少ない荻窪地域で眺望のいい階段を探し、段数までコラムで報告したのも思い出の一つです。

かつては、子供たちのよき遊び場だったものの、いまでは忘れられがちな善福寺川。コロナ禍で在宅勤務になった人々の散歩コースとして見直されたのが愉快で、『善福寺川があってよかった』というコラムを書いたのも思い出です。

本誌の原稿の締め切りは早いので、今日はまだ1月の半ば。何が起きるかわからないトランプ政権の発足もこれからですが、新しい年が平和であることを祈って筆を置きたいと思います。ご愛読くださったみなさん、お世話になった関係者のみなさん、長いことありがとうございました。

荻窪地域区民センター協議会OB　松井和男